

TIJ 日本語教育研究会通信

No.55 2014.9.30 発行

発行: TIJ日本語教育研究会事務局
東京都葛飾区新小岩1-17-10
Tel:03(5607)4100 /Fax:03(5607)4102
E-mail: tij@tij.ne.jp
TIJ ホームページ <http://www.tij.ne.jp>



お彼岸も過ぎ、秋の気配が色濃くなってきました。今年の夏も大雨、洪水、土砂崩れなどの災害があちこちで発生し、地球の気候変動が加速しているように思われます。被害に遭われた方々には、心からご冥福をお祈りいたします。

昨年に続き今年も7月に、中国平湖市の専門学校から日本語の先生たち3人がTIJにいらっしやって、日本語教育の研修を受けられました。代表の先生が研修の感想を書いてくださいましたので、今号に掲載させていただきます。

8月4日と5日に開催された日本語教育振興協会主催の日本語学校教育研究大会に、TIJから7名の教師が参加しました。その報告を掲載いたします。

また、神奈川県大和市で、地域の外国人に向けて「つるま読み書きの部屋」を開いていらっしやる方に活動紹介の原稿を書いていただきましたので、ここに紹介させていただきます。

8月末から9月上旬にかけて、例年通り獨協大学の学生さんがTIJで教育実習を行いました。その感想も掲載させていただきました。

【本号の内容】

1. TIJでの研修の感想
2. 日本語学校教育研究大会の報告
3. つるま読み書きの部屋の活動紹介
4. 教育実習感想

TIJでの研修の感想

今年の7月13日から約二十日間、T I J 日本語研修所の皆様のおかげで、私たちは多くの日本語の授業を見学することができました。ありがとうございました。

実は、私は10年前に一度日本へ行ったことがあります。広島県福山市というところでした。そこで、私は仕事をしながら日本語を勉強していました。3年間ぐらいいたのに、東京へは一回も行ったことがありませんでした。残念でした。今回、東京に行くことができ、本当にうれしかったです。東京は私が以前働いていた福山市とは、かなり違います。福山は小さくて、静かな地方都市です。昼間でも人が少ないです。しかし東京は大都市ですから、中国の上海のように人が多くて、にぎやかです。私は人が多いところは、混雑し、汚いと思っていましたが、驚いたことに、東京は人が多いところでも、少ないところでも、ごみなどがあまり見られませんでした。清潔で、空気もきれいです。道路で多くの車がかなりのスピードで走っていても、クラクションがほとんど聞こえません。店や地下鉄が、たくさんの人で混雑していても、大きな声が聞こえません。静かです。地下鉄の中では、みんな本を読んだり、新聞を読んだりしています。

今回私たち3人はT I J 東京日本語研修所に来て、二十日間にわたって、日本語教育法の研修をしました。いろいろな体験ができて、よい勉強になりました。

T I J の留学生達はいろいろな国から来ています。中国からの留学生ももちろんいます。T I J では留学生の日本語のレベルによって、クラスを上級、中級、初級に分けています。中級、初級のクラスには中国人もいるし、ベトナム人もタイ人もいます。ある上級クラスの生徒が、全部中国人だったことに驚きました。今のように、中日関係が微妙な時期でも、たくさんの中国人が日本で日本語を勉強しているのです。これにはやはり不思議な感じがしました。しかし、これは現実です。こうしたことから、政府間のズレの有無を問わず、それぞれの現場での中日両国の文化交流は今後も盛んになるだろうと思いました。

T I J の留学生達は、日本語を勉強する意欲が強く、しかも真剣です。授業のとき、みんな真面目にやっています。レベルが高い生徒も低い生徒も、一生懸命日本語で話しています。先生方は優しく、たとえ生徒が間違えたとしても、丁寧にその間違いを直していました。平湖の学校の生徒達は真剣味に乏しいです。彼らに留学生達の精神の半分でもあればよかったのにと思いました。

T I J の授業のやり方がとてもいいと思います。とくに感心したのは、上級クラスのディベートの授業です。一つのテーマを設定し、たとえば「お金もうけ」というテーマだとすると、そのテーマについてクラスを二つに分け、一方は反対、一方は賛成の意見を言います。両方の意見と討論が活発で面白いです。たとえ発言者の日本語が間違っただとしても、みんなは笑いません。発言者が、自分の持つ日本語能力の全力をあげて発言していることが、みんなに理解されているからです。このようにして、留学生達の会話能力、実際の応用能力は効果的に高められていきます。

そして、T I J の先生方ですが、みなさんは長年にわたって多くの教育経験を積んでいらっしゃると思います。ですから、先生方の授業は面白くて、生徒達に大変人気があります。

留学生達はよい雰囲気の中で、楽しく日本の知識を身に付けられます。

印象的だったのは初・中級向けの教科書「日本語で話そう4」を使った会話授業です。授業の内容は「不動産屋で部屋を借りる」でした。先生は、自分で集めた不動産についての本物のポスターを教材にして、先生自身は不動産屋になり、生徒は部屋を探す客になりました。内容の違うポスターを使って、一つ一つ生徒達と練習します。たとえば：

生徒：あのう、アパートを探しているんですけど。

先生：どんなのをお探しですか。

生徒：きれいで、環境がよければ、少しぐらい都心から遠いところでも構わないんですが。

先生：ご予算は。

……

こうして練習しながら、生徒達が発話したときに出てきた言葉の使い方や発音に、もし間違いがあれば、先生がその場ですぐに直していました。その内容がよくできたときは、生徒達の間で練習させます。生徒達が真面目に練習している様子は、まるで本当に不動産屋と相談しているようでした。授業の流れがとてもスムーズに見えました。

面白かったのは、新しく出てきた単語や文法を説明するときです。平湖での私達の授業では、先生も生徒も中国人ですから、中国語で説明すれば、みんなたいいわかると思います。しかし言葉だけでは、いくら説明しても分からない場合がよくあります。そのときT I Jの先生方は、表情、身振り、手振りなど、ジェスチャーでその言葉や文法の意味を表現します。まるでパントマイムを見ているような面白さです。それしか方法がないのですから、仕方がないといっても、外国人に日本語を教える日本人の先生方のご苦勞は、なみたいいではありません。しかし同時に、日本人の先生方はみんな優しく親切だという印象が留学生達に残ります。

研修時間は短いものでしたが、大変よい勉強になりました。今後は、T I Jの先生方の教え方を私達なりに生かして、平湖の生徒達の日本語能力を上げるために頑張りたいと思います。

高紅華(平湖市職業中等專業学校)

日本語学校教育研究大会の報告

—ワークショップ「多様化する学習者への取り組み～ベトナム編～」に参加して—

ワークショップの進行役の松田真希子先生は現在、金沢大学でベトナムから直接留学してきた学生に日本語を指導し、ベトナム人学習者の特性について研究なさっているということで、グループに分かれ、それについて話し合うワークショップでした。実際にJLPTのN1に合格したというベトナム人学生の自己紹介を聞いてその特徴を話し合うことから始まりましたが、とてもN1レベルとは思えない拙い日本語で、それは主に発音から来る印象だと感じました。データから見ても中国、インドネシア、タイの学生と比べて初級終了時の試験の平均点が低く、日本語初級習得が遅れがちだと言えるということでした。以下、当日の話に出たベトナム人学習者の特性についてまとめます。

1. 文法について

文法習得上の困難点はタイ・マレーシアの学習者とあまり異ならず、誤用は「の」の脱落、あるいは過剰使用、不自然な漢語の使用、語順の逆転などが特徴である。日本語：SOV、ベトナム語：SVO の語順の違い、日本語：修飾—被修飾、ベトナム語：被修飾—修飾となる形容詞の使用の違い等による。

2. 漢字について

漢語由来の語彙（漢越語）が全体の6—7割と言われている。しかし、ベトナム語は表音文字で学習者は漢字を知らない。そのため、学習者に漢越語知識の活性化を促す必要がある。例えば「暴動」は「BAO DONG」で、「動」は「DONG」など日本の漢字の読みで類推できるものがたくさんある。そのことを知れば漢字の勉強は楽になる。ただ、日越で語彙の一致あるいは部分一致が現れるのはN4レベルでは少なくN1-2レベルになると多い。したがって初級後半ごろから漢字導入時にそのことを伝えていけば効果があると見られる。教師もその知識を持っていることが望ましい。今回、どの漢字がどの音に当たるのかのデータベースを松田先生に提供していただいたので、活用法を検討したい。まずはTIJで作成した漢字教材に漢越語の音の表示を入れることから始めている。

3. 発音について

ベトナム語では単語によって変化するピッチアクセントやイントネーションの習得、モーラに相当するものがない。特に拍の等時性を保つために一つ一つの音節を区切る傾向がある。その際に声門を閉鎖させたり、咽頭を緊張させることがある。そのため、例えば「田中先生」と言う時、「たー」「なー」「かー」「せん」「せい」のように聞こえる。発音させる際はモーラの等時性を維持しながら、一息で発音させるようにする。アクセント、イントネーション、モーラなどについて根気よく教え、教科書の語彙リストにアクセント記号をつけるなどの意識化も必要である。また、ベトナム語のフィラーは「えあん」「あん」でその多発が聞きにくさの一因にもなっているので、それを「えー」などに変えさせるだけでも聞きやすくなる。まずはミニマルペアなどで聞き分ける力、自分の発音に対する自己モニター力をつける。スマートフォンのディクテーション機能を使って日本語で話し、それがきちんと日本語になるのかやってみる、などの方法もある。歌のように覚える、あるいは、お気に入りの俳優などの話し方をまねさせることなども効果的かもしれない。授業中教師がモデルを言い、学生に言わせても、本人はまねしているつもりでまねになっていないことが多く、シャドウイングもただやらせても効果がない。

4. その他 内的・外的な要因

- ①まちがいは気にしない傾向がある…正しい日本語を使ったら評価が上がることを教える
- ②集団でものごとを解決する傾向がある…作文や読解問題をグループでやらせると良い
- ③議論をする習慣がない…議論は論点がずれてしまうことが多いので、ディベート等は不向き
- ④ほめられることを好む…皆の前でほめると効果がある、逆に皆の前で直されるのは好

まない

以上、実際の教室にはベトナム人学生だけではないので、上の事柄を踏まえてどう授業を行うかが課題ですが、ベトナム人学習者の特性を皆が共有し、授業を工夫していくことが重要だと考えさせられたワークショップでした。現在、中級の一つのクラスで読解問題に対してグループで協力して答えを出す、という試みを始めたということですが、授業への参加度がアップし、なかなか良いとのこと。今後も皆で様々な試みをしていきたいと思っています。

市川さゆり (TIJ)

ーワークショップⅡ「実践の共有を通した学び合い・その方法2ー ディクテーション・ミニ作文をトピックにー」に参加して

このワークショップは、実際の授業事例を「共有」することを体験し、建設的な実践共有とは何か、より良い学び合いに必要なスキルとは何かを考えるものであった。

まず大枠として、実践共有のスタイルには、「小技・小ネタ・小道具 (の共有・紹介)」、「授業紹介」、「実践探求」の3つがあり、前者が最も含む範囲が狭く、後ろに行くほど共有する内容が広がると位置づけられている。今回は、この3つのスタイルのうち前者2つの体験が準備されており、「小技・小ネタ・小道具」では、ディクテーションの授業で使われた教材、「授業紹介」では、ミニ作文の授業がリソースとして取り上げられた。

前半は「小技・小ネタ・小道具」についてで、あるディクテーションの授業で使われたシートや例文を共有し、それらについて、各グループで①気づいたこと、② (ポジティブな) 質問、③自分たちの実践、の順で意見を出し合い、最後に④感想、気づいたこと、改善点、などをまとめる、という手順で進められた。グループワークを始める前に、発表者から授業の概要、対象とする学習者などについて説明があり、実際に授業で使用されたものを見ながら意見交換が行われた。しかし、いざコメントをしようと思うと、「この授業はどんな意図・目的で行われたものなのか」、「このディクテーションでどんな力を養おうとしているのか」といった教育理念やポリシーが気になってしまい、そこに共有されているシートや例文だけで議論するのは非常に難しいという印象を持った。この「小技・小ネタ・小道具」については、言語教育の理念やポリシーについては言及せず、目の前にあるリソースのみを共有し意見交換する、ということだったが、他の参加者からも同じように「理念に触れないのは難しい」という声が上がっていた。

後半は「授業紹介」として、発表者が実際に行ったミニ作文という授業の内容とその成果物の一部が共有された。こちらは、学生が書いた作文が実際に目に見える形で共有され、それらが作成された経緯についてもある程度詳しく授業担当者から聞くことができているためか意見交換しやすく、他のメンバーからも建設的な意見が多く出されていた。そのことから考えると、上記の「小技・小ネタ・小道具」よりも「授業紹介」のほうがより共有しやすいスタイルであると思われる。ミニ作文という試み自体も授業設計者として非常に参考になったが、それよりもそこで共有された学生たちの作文の内容が

大変興味深く、その中に垣間見られた発想の自由さ・豊かさに、まだまだ授業のヒントが隠されているのではないかという可能性が感じられ、違う意味でも得るものが大きかった。

以上、2つのスタイルを体験してみて感じたのは、共有する範囲があまりにも狭い(「小技・小ネタ・小道具」のように)と、それについて十分な理解ができず、したがって建設的な意見を出すことも、またそれを自分が活用することも難しい、ということである。職場において実践共有はされるべきものだとは筆者も考えているが、その共有範囲及び方法についてはよく吟味した上で行わないと、本来の意図と違う受け取られ方をしてしまう、いい教材があってもうまく活用されない、などの残念な結果になってしまう可能性もあるため、十分な配慮が必要であると感じた。

阿部美紀子 (TIJ)

—カミシバイを使った基礎日本語の指導法—

私が参加した8月6日の自由研究発表、「媒介語を必要としないパワーポイント・カミシバイを使った基礎日本語の指導法」について報告します。

これは大阪大学の西口光一先生が開発、活用している「NEJ:A new Approach to Elementary Japanese--テーマで学ぶ基礎日本語」(くろしお出版)を使った教室活動におけるパワーポイントの「カミシバイ」の効果についての実践発表でした。

このテキストは各学習ユニットの中核となるナラティブ(登場人物のモノログ、と私は理解しました)を学習者が何度も聞き、読み、理解して模倣していくことで、最終的には自分自身のことを語り、エッセイを書くことのできる日本語を習得することをめざしています。

この「ナラティブは、同一テーマで何人かの登場人物がそれぞれのことを語り、それぞれの発話を学習者がリピートし、理解していく過程でテキストにもある絵が、パワーポイントで学習者の前面に映し出されます。この際の理解活動の中に、小さい三つのステップが含まれます。

- ① 語彙の理解
- ② テキスト(文単位の発話)の理解
- ③ この登場人物の発話全体の理解

というものです。これはまさにわたくしたちが初級のクラスで踏み段階と同一であると考えられます。

西口先生の今回の発表の発端は、現在の多くの場で行われている日本語教育が「直接法」を標榜しながらも、元来パーマーの **Oral Method** を応用した長沼の直接法とは大きく違ってきているという認識から始まっています。すなわちかつての **Oral Method** で組み立てられた長沼の「直接法」では、教師の周到かつ慎重な授業運営の中で「媒介語を使う必要のない」直接法であったのに対し、現行の多くの直接法は、単に「教師に媒介語を使うことを禁じた」直接法になっている場合が多いという指摘です。

「初級クラスにおいて媒介語を使わず、直接法で日本語を教えるのは、学習者の中に、

日本語を日本語のまま理解し、内在化させる『言語心理経験』のためである。その『言語心理経験』のプロセスの中では『わかる』事象が『わかる』日本語と結びつく、『わかる』経験を積み重ねることで、『わからない』ことが背後に押しやられていく」この言葉が特に印象に残りました。

ともすれば教師は、学習者がすべての語彙、表現、文型を「わかる」ことをめざし、また学習者は、「わからない」ことがあるたびにそこに立ち止まり、前にすすめなくなる傾向があります。特に非漢字圏学習者の急増している現場の初級クラスでは、困難は大きく、媒介語を使わない教室運営の限界すら感じることもあるのが実情です。

渡部尚子 (TIJ)

—「集中コースにおける文化・芸術クラスの実践」を聞いて—

8月に行われました日本語学校教育研究大会2日目に「集中コースにおける文化・芸術クラスの実践」と題された自由研究発表を聞く機会に恵まれました。留学生だけではなく多様なニーズや目的を持った日本語学習者が多いTIJにとって、今後の新たな方向性の何か良いヒントになることがあるのではないかと考え、会場に入りました。発表者は京都の日本語学校の先生ということもあり、発表内容に興味を持たれている方で会場内はほぼ満席に近い状態でした。

当日の発表は以下の通りです。

1) 「文化・芸術クラス」設置の背景

近年、進学を希望する学習者が減少している一方で、日本文化に憧れ、京都という地をわざわざ選んで留学する進学者が増えてきた。以前から非進学者のためのクラスが存在し、そこで「文化」を取り上げることがあったが、テキストを読んだ後で映像資料を視聴する形のものが多く、必ずしも本格的に取り組むものではなかった。そこで、日本文化・京都文化を実際に体験し、これを通じて日本語力の向上を図ること、地域の方々と密に連携を取って行くこと、日本文化の中心である京都という街を十分に理解してもらうこと、安定した数の学習者の確保を目的として「文化・芸術クラス」を設置することとなった。

2) 実践報告

①対象クラス、対象学習者

集中コース (intensive course) の中級レベルクラス

②学習期間

1年間

③学習目的

日本語力の向上 (運用力を伸ばす)、自国の文化を外から客観的に見つめなおすこと、異なる国から来日しているクラスメートと異文化交流をし、世界の中での自国の文化の位置づけを学ぶこと

④学習到達目標、評価基準

現在のところ、総合日本語と科目別に分けて到達目標を設定し、評価している。

⑤カリキュラム

週 20 コマ (1 コマ 45 分) のうち、文化に関する科目 A (地理・歴史等の一般日本事情) と B (漢字、いけばな等専門分野) に分けてそれぞれ週 2 コマずつ設定。A では「地理」「歴史」「伝統工芸・伝統芸能」など 10 ほどのテーマを設定。B では 1 学期に 2 つのテーマを設定し、そのテーマに沿って、事前学習→体験→まとめ という流れで進めた。

⑥カリキュラムデザインの特徴

外部専門家とのコラボレーション。例えば、華道家元池坊とのコラボレーションの [いけばな] では、次のようなコースデザインを実施。事前学習：自国の花や花文化について調べ、発表する。次に講師を招き、日本の華道の歴史等の講義と生け花のデモンストレーションをしていただく。(その際、講師からタスクをいただく) →体験：いけばな資料館を訪問し、タスクの発表といけばな体験をする。→まとめ：学習者は講義や体験などから学んだことをレポートにまとめ、講師に提出する。合格者には講師のサイン入りの修了書が発行され授与される。

3) 学習者アンケート調査より

日本語学校で「文化」を学ぶことについて学習者からは、「おもしろい」「文化を勉強することは大切だ」「日常生活では体験できないことができてうれしい」という声があった。

一番の目的であった「文化の学習を通じての日本語力向上」という点では、概ね好評だった。科目 B の事前学習→体験→まとめ というカリキュラムも一定の理解が得られたようだ。

また学校としても日本語学校の活動を企業や地域の方々に理解していただく機会ができたことは大きな収穫であった。そして、このカリキュラムを通じて教師自身が日本文化・京都の文化の奥深さに改めて気づくことができた。このことがこのクラスとは別の、日本人対象の文化プログラム ([ニッポン学校]) の立ち上げ等にもつながった。

4) 分析と考察

科目 A のテーマ設定について、できるだけ多くの学習者の希望に沿おうとしたあまり、テーマを欲張りすぎ、1 つのテーマにかける時間が短くなってしまった。学習者からも「科目 A のテーマが多すぎた」「もっと 1 つのテーマを深く学びたい」という意見が出た。授業を担当した教師からも「学習した知識を運用する時間が取れるとよかった」という声もあった。

評価について、最終的には日振教の作成した評価表である「ビジネス日本語準拠プログラム・評定表」のような、CAN-DO の形で評価を出したいと考え、現在検討を重ねているところである。

上記の研究発表を聞いて、京都にある学校ならではの特色を活かした大変魅力的なプ

プログラムだと感じました。TIJがある葛飾区や隣接する江戸川区などは東京の下町と言われており風鈴や江戸切子などの江戸文化が存在している地域でもあります。こういった地域性を活かした日本語教育の新しいプログラムを考えて発信していく時期に来たのかもしれないとも感じました。

石井温子 (TIJ)

一日振協ビジネス日本語プログラムガイドラインの報告—

昨年の当研究大会にて「ビジネス日本語カリキュラム・教材開発プロジェクト」の中間報告が行われ、「日振協ビジネス日本語プログラム」作成に向けての事例が報告されました。(詳しくは「TIJ 日本語教育研究会通信 No.52 2013.9.24 発行」参照)

本年度の研究大会では、標題のプログラム及び準拠プログラム登録についての概要が発表されましたのでご報告いたします。

「日振協ビジネス日本語プログラム」(以下、nBJ)とは、日振協が策定した以下の理念及び教育目標のもと、日本語教育機関が「認定コース」の中で実施するキャリア形成のための日本語教育プログラムです。

理念：日本語教育機関の社会的貢献を共通認識とし、日本社会のニーズに応え、価値ある人材の養成、送り出しを目指す。

教育目標：日本国内の企業、および日本国外の日本企業において、求められる能力を発揮し、企業活動に貢献できる日本語人材を養成する。

(研究大会で配布された資料より抜粋)

nBJの特徴は「日本語力」「日本社会・文化対応力」「社会人基礎力」を3本柱として、日本企業への就職を希望する能力・意欲の高い留学生を対象に、ビジネス日本語研修、日本ビジネス研修、社会人基礎力養成、インターンシップ・就職支援(オプション)を1パッケージにして組み立てられているところです。2007年から4年間実施された「アジア人材資金構想」以来、高度外国人材育成にむけて、人材関連・研修関連業者がBJに参入してきており、日本語教育機関として質の高いプログラムを提供し競争力をつけようというものです。

日振協は、nBJのガイドラインに沿った「日振協ビジネス日本語準拠プログラム」(以下、「準拠プログラム」)を設置します。各日本語教育機関は必要要件を整えて申請し、審査を経て、準拠プログラム運営校として日振協に登録されます。運営校となれば「認定コース」実施校として留学ビザが申請できますし、nBJのロゴをHPに貼り付けてブランド力を高め、他校との差別化を図ることもできるということです。

準拠プログラムの概要は以下の通りです。

授業時数： 年間 760 時間以上。

導入モデル：

- ①分岐独立型…一般コースとして開講し、しかるべき期間ののち一般コース・ビジネスコースがそれぞれ独立する。

②選択型…一般コースと並行してビジネスコースを開講。年間 240 時間以上をビジネス日本語関連授業とする。

③途中分岐型…一般コースから徐々にビジネスコースに移行していく。

受講者：原則として N3 以上の日本語運用力を有する者。1 年課程の場合は N2 以上。

教員資格：日本語教育機関の運営に関する基準によるが、ビジネス日本語教員として必要な研究・講習会に参加し、質の向上に努める。

以上の発表を聞いたのち、その場で「ビジネス日本語準拠プログラム届出書（案）」が配布され、所属校で申請するとしたらどのようなプランを作るかを考えるよう指示されました。届出書に記載する内容は多岐にわたっています。

対象レベル、実施する認定コース（進学／一般）、ビジネス日本語の実施期間、授業タイプ（分岐型／選択型）、ビジネス日本語時間数、クラスサイズ、教員数（経験年数、ビジネス経験）、ゲストスピーカー数、

レベル別到達目標（日本語力、日本社会・文化対応力、社会人基礎力、キャリアデザイン）← それぞれの分野ごとに評価項目を設定

TIJ で「認定コース」を行なうとしたら…と考えましたが、なかなかイメージできずペンが進みません。周囲を見回しても同じような状況で、結局、現在ビジネス日本語コースを開講している日本語学校の事例を聞くことになりました。（当日参加約 40 名のうち開講校は 3 校）

- ・大規模日本語学校 A 校では、開講 4 年目、4 月と 10 月スタートで最大 15 人のクラス編成。学生は年々増加傾向。就職斡旋の別会社を有しており、就職率は 80～90%、IT・サービス・観光系が多い。
- ・T 専門学校は日本人学生が多く、日本語より英語授業のコマ数が多いことが問題。
- ・K 学院は進学・ビジネス希望者が混在のクラス。

ビジネス日本語をコースとして掲げるには、やはり明確な結果＝就職が必要です。そのためには、ビジネス日本語教員、ゲストスピーカー、インターンシップの受け入れ先など、開拓していかなければならない分野が多々あります。nBJ をブランドとして確立していくためにはどうすればいいか、日振協・各校の今後の課題だと思われます。

北内直子（TIJ）

—日本語教育スタンダードプロジェクト発表—

日本語教育振興協会の「日本語教育スタンダードプロジェクト」が発足して 5 年になります。私はこのプロジェクトの委員の一人として活動してきましたが、今年の大会の当プロジェクトの発表として、「プレイスメントテストを作成してみよう」という課題を掲げ、参加者の皆様にワークショップ形式で作業をしてもらうことになりました。

日振協の日本語教育スタンダードについては、一昨年の TIJ 日本語教育研究会通信 4 9 号でご報告しましたが、CEFR : Common European Framework of Reference for

Languages: Learning, teaching, assessment の略（日本語訳：ヨーロッパ言語共通参照枠）を参考にして作成した、日本語学校で学ぶ学生のためのスタンダードです。到達目標表は、学生のレベル（もっとも下位の NS1 から最も上位の NS8 までの 8 レベル）と能力（聞く、読む、書く、話す、漢字）の関係を can-do statements（何ができるか）で示しています。

新しく入学する学生を、能力に合ったクラスに入れるために行う「プレイスメントテスト」には、文法テスト、読解テスト、聴解テスト、会話テストなどがありますが、今回の発表では、「日振協版日本語教育スタンダード到達目標表」を参考にして、NS1 から NS3 までの会話能力を測定するテストを作ることになりました。

「日振協版日本語教育スタンダード到達目標表」の話すことの中の【やりとり】の例示は以下です。

NS1	<p>【やりとり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・簡単な挨拶ができる。 ・場所や日時や値段などがきける。 ・ふだんの生活や休日について、簡単なやりとりができる。 ・ほしいものやしたいことが言える。 ・人を誘うことができる。 ・好き嫌いが言える。 ・簡単な理由を言って誘いを断ることができる。
NS2	<p>【やりとり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手に助言したり、助言を求めたりできる。 ・謝罪の気持ちを伝えることができる。 ・道を聞くことができる。 ・電話の応答ができる。
NS3	<p>【やりとり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常的な状況に、ほとんど対応できる。 ・友人との会話で、自分の意見や考えが言える。 ・待遇表現を踏まえながら、依頼、相談ができる。 ・待遇表現を踏まえながら、許可を求めることができる。

以上は、あくまでも例示なので、その他のものも加えていいという前提で、「会話の場面、設定人物、会話内容」を考える作業を 4 人ずつのグループに分かれて行いました。作業後、各グループに発表していただきましたが、印象に残ったものを書きます。

【NS1 レベル】

① 会話場面—学校 設定人物—教師と学生

会話内容

教師：こんにちは。

学生：こんにちは。

教師：Aさんは、料理が好きですか。

学生：はい、好きです。／好きじゃありません。

教師：どうしてですか。

学生：

教師：どんな料理を作りますか。

学生：

教師：そうですね。こんど一緒に～料理を食べに行きませんか。

学生：ああ、いいですね。いつですか。

教師：～日はどうですか。

以下続く。

② 会話場面—学校 設定人物—教師と学生

会話内容

教師：こんにちは。

学生：こんにちは。

教師：Aさんは休みの日はどんなことをしますか。

学生：映画を見ます。

教師：どんな映画が好きですか。

学生：

以下続く。

【NS2 レベル】

① 会話場面—一家の中 設定人物—ホストファミリーAと留学生B（イラストを見せる）

会話内容

A：Bさんの町はどんな町ですか。

B：

A：日本に来る前は何かをしていましたか。

B：

A：学校を卒業したら何をしたいですか。

B：

A：ご家族の写真を今、持っていますか。

B：はい、持っています。

A：見せてください。これはどこですか。

以下続く。

② アルバイト先の店長に、休みのお願いをしてください。（電話で理由を述べる）

【NS3 レベル】

① 会話場面—コンビニ 設定人物—客Aとアルバイト店員B（イラストを見せる）

会話内容

A：トイレある。

B：はい、ございます。

A：どこ。

B：丁寧に場所を説明する。

② 留守番電話にメッセージを残してください。（用件は事前に決めておく）

TIJにもプレイスメントテストがありますが、それが日本語スタンダードに合っているかどうかは、検証したことがありません。TIJでも「日本語スタンダードに合わせたプレイスメントテスト」の勉強会を開きたいと思います。

広瀬万里子 (TIJ)

生活に役立つ日本語の読み書きを学ぶ「つま読み書きの部屋」の活動

2008年夏に、「地域の日本語教室で『読み書き』を教えるということ」として、「つま読み書きの部屋」設立のきっかけとなった養成講座について報告をさせていただきました。ここでは、その後の6年間の活動についてご紹介したい。

この教室は常設ではなく、全5回の講座を年3回行っている（月曜夜と火曜の午前の2クラスを同時開催）。各回ともに、医療や教育、災害などのテーマに沿って、市役所や病院を訪ねたり、子どもが通う学校から配布物を受け取ったりした場面などを具体的に想定した内容で、すべて教材は手作り。地域に定住している外国人にとって、「生活に役立つ日本語の読み書き」という視点はとても重要で、特に多くの外国籍市民が住む大和市では有効な活動であるという判断のもと、2010年度から市の協働事業となった。

協働事業になってから、教室の運営はそれ以前と変わらずボランティア側の役割だが、教室の確保、活動費の負担（一部）、広報活動は、市の国際課が担当してくれている。

「協働」とは、それぞれの担い手が強みとするところを生かし、協力して事業を作っていく、ということである。市の担当者や信頼関係を築きながら、こまめに報告・調整を行い、事業計画や総括を形のあるものにしていく中で、ボランティアだけで運営していたところと比べ、事業の質がどんどん上がっていくことが確認できた。

2年前からは「専門家の活用」—市役所の職員の方に実際に教室に来てもらって授業をする—を進めている。AEDの使い方や、災害時の避難所の生活、自転車の交通ルールなど、日本人にとっても役に立つ内容だ。今まではボランティアが、資料集め、資料作成すべてをやっていたが、専門分野の解説は専門家に任せる。日本語の資料を作ったり、やさしい日本語に言い換えたりするのをボランティアが担当する、と役割を分けたのである。私たち日本人も外国人学習者と一緒に学べ、また、市の職員に、外国につながる市民の生の声を聞いて知ってもらえる有益な場になっている。

今年の4月には、協働事業の大きな目的のひとつである「成果物のまとめ」を行った。これまで作成した教材と教案を整理し、写真を中心にした活動報告をホームページ上に公開した。テーマは「健康」「安全」「生活」「移動」「人とつき合う」「地域参加」「通信」「学校」「働く」の9つに分類。教材はそれぞれ単発で扱えるものなので、他の日本語教室でもカリキュラムの合間などに使えるようになっている。是非、ご覧いただきたい。

生活に役立つ日本語の読み書きを学ぶ「つるま読み書きの部屋」

<http://www.enjokyokai.org/turumayomikakinoheya/index.html>

毎年秋に公開講座を設けることによって、新しいボランティアも加わり、機動力も上がってきた。教材作りは時として「生みの苦しみ」を伴うこともあるが、授業で学習者に「役に立った」と言われると、そんな苦労も吹き飛んでしまう。「生活に役立つ」テーマというのは、身の回りにいくらでもある。これからも、楽しみながら続けて行きたい。

「つるま読み書きの部屋」代表・志田早苗

教育実習の感想

実習を終えて

獨協大学 左野仁美

今回、日本語学校で教育実習をし、実際に異国の人々に日本語を教えることが初めてだった私にとって、毎日驚きと発見でいっぱいでした。実習期間中は、初級から上級まで幅広いレベルのクラスに入れていただき、レベルの違いや、母国語によって異なる習得度合いの違いなども生身で見ることができてとても良かったです。

TIJの実習で一番強く感じたのは、教師と学生の距離が近く、学生にとってとても学びやすい環境であるということです。生徒数が多かれ少なかれ、教師は一人一人をよく見ており、面接だけでなく授業を通して学生の環境を把握しながら、学生との距離を縮めているように感じました。それが学生の学習意欲を引き上げているように感じましたし、授業でも積極的に学生が発言したり、よく笑ったりする姿を見ることができました。また、TIJの教育理念にもあるように、日常の生活で使える日本語の習得を実践されていると思いました。私は、大学での実習の時は、「みんなの日本語」を参考にしながら、未習の単語や文型は絶対に使わなかったり、きちんと教科書に沿った教案を作ったりと、凝り固まった考えでした。しかし、実際にTIJの授業を見てみると、どの先生方もそこまで語彙コントロールなどを厳しくしておらず、授業はスムーズに進んでいきました。しかし、それこそ学習者の能力を引き上げているし、実践的で効率的であると思いました。

私は今回、初級のクラスで二回の実習をさせていただきました。クラスでは比較的会話はよくできる方から、日本語をまだあまり理解することができない方までレベル差が見られました。私が実習をしたとき、私の導入不足ゆえに、生徒があまり発言しないということが起こってしまいました。そのとき私は、なんとか生徒に発言してもらおうと促しましたが、結局私が文を言ってしまいました。しかし、阿字地先生から指導していただくに当たり、生徒の中にあるものを引き出すことが一番大切であることを知りました。また皆レベルが違うのだから、教室内で一人一人の様子を見て練習をさせることを心がけることも私には足りなかったと感じました。ただ新しい文型を導入するだけでなく、導入後、学生がその文型を使うことができるまで導くのが教師なのだと気づ

くことができました。

この実習で得た経験は、改めて日本語教育というものを考えさせてくれました。留学生の生活環境についても私には刺激的でしたし、それぞれの先生方の工夫により、どの授業でもいつも新しい発見をすることができました。TIJで素晴らしい先生方に出会ったことで、漠然としていた教師の像がはっきりとしました。また、日本語を教えることがこんなに面白いと感じたことはありませんでした。約三週間、TIJで教育実習をさせていただき本当にありがとうございました。

教育実習を通して

獨協大学 中村彩果

今回 TIJ での計 12 日間の教育実習を通し、日々新しい発見や学びを得ることができました。実際に日本語教育の現場を見ることができ、また、教壇に立つことができ、大変貴重な経験ができたことに感謝します。

これまで大学での日本語教育の授業では、「みんなの日本語」のテキストのみしか扱ったことがありませんでした。TIJ では独自のテキストを使用しており、初めはうまく扱えるか不安に感じました。実生活に近い場面や状況に沿った内容の学習項目になっていたのも、普段自分がどのような時に使用する言葉、句型なのかということを考えて授業を作る必要があると学びました。

計 2 回の教壇実習では、教えることの難しさを改めて痛感しました。特に、「臨機応変に対応する」ことの大切さを感じました。学習者からどんな意見がでるかをあらかじめ考えてはいましたが、予想外の回答が飛び出すこともあり、その時に慌てずに対応しなければいけません。それぞれのクラスや学習者の性質によっても、授業の作り方は異なると学びました。私が担当したのは初級クラスでしたが、とても協力的なクラスだなと感じました。わからないことがあったり、うまく答えられないことがあったりするとお互いに助け合う姿が見られ、印象的でした。その雰囲気壊さないよう、みんなでコミュニケーションのとれる授業にできるよう心掛けました。学習者の気持ちを引き付ける、日本語をもっと話したいと思わせる、そういった環境を作ることが重要であると思いました。

実習期間には担当のクラスだけでなく、初級から上級まで様々なレベルのクラスを授業見学させていただきました。レベルによって授業形成は異なり、色々な指導法があるなど思いました。また、学習背景などによって学習意欲もそれぞれですが、どのようにして日本語への興味を抱かせるかが大切であると、熱心に指導する先生方の姿から学びました。

今回の教育実習で実際の日本語学校を見ることができ、また、先生方と色々なことを話す機会が持て、多くの経験ができました。外国人に日本語を教えるという貴重な経験ができたことに感謝いたします。TIJ で教育実習ができたことをうれしく思います。今回は実習を受け入れてくださり、そして熱心にご指導いただき、大変ありがとうございました。